

02の講義内容

文字のはなしと音訓について

—文字資料(漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字)から日本語學資料へ—

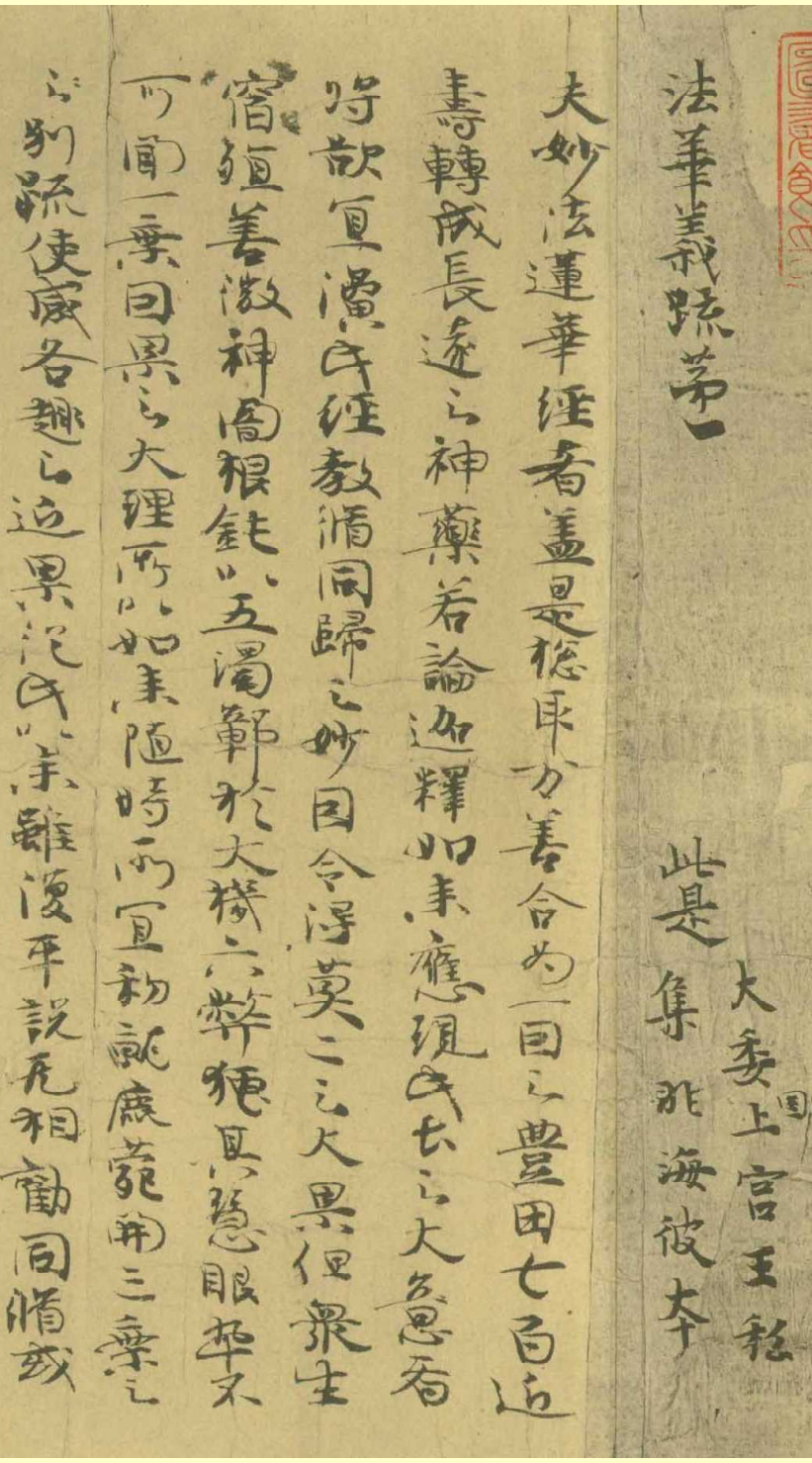
日本最古の文献資料とは

萩原 義雄

私たち人類が言語活動を開始したとき、話す⇨聞くこと、書く⇨読むことを、いつどのようにし始めたのか興味を抱かずにはいられません。

このなかで、話す⇨聞くことの言語形態は一過性にすぎず、露の如く消滅していきます。これに対し、書く⇨読むことの言語形態は、後世に継承することが可能でありました。ここでは、後者の書く⇨読むことの言語形態を素について話を進めてみましょう。

漢字を用いた日本語表記の遺品としては、五世紀半頃の二種の「金石文」、紙の資料としては、聖徳太子自筆本『法華義疏(ほつげきしよ)』『御物、推古天皇二十三年(西暦六一五)』や後の『日本書紀』所載の『十七條憲法』が知られています。この『法華義疏』の料紙は、中国の唐紙を用いていて、未だ本邦では和紙の生産ができず、輸入した高価な品物の一つであったようです。ここに尤も最古の日本に現存する墨書文献資料として、今日まで維持保存されてきました。この書記者が聖徳太子なのかについては、事の真偽そのものについては諸説があり、未だ定説を見ない資料でもあります。ただ、この書記文字については、当代の四六駢儷体の文章的特徴を表出させていることは声に出して読んで見ればおわかりになるでしょう。



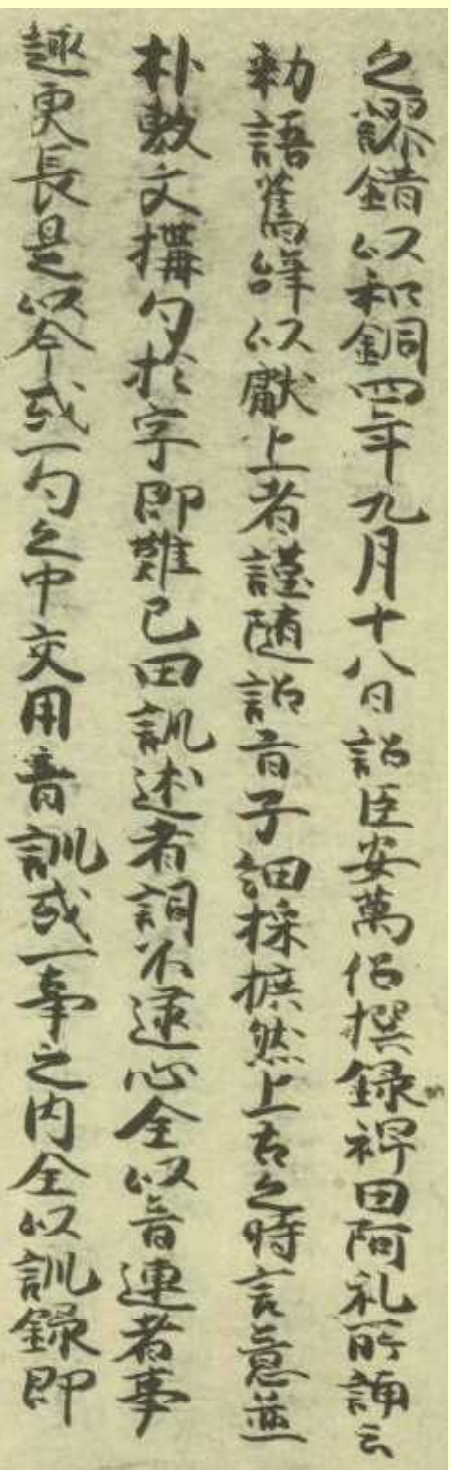
法華義疏第一

大委上官王程  
此是集非海彼本

夫妙法蓮華經者蓋是極中方便善合為一曰之豐田七百近  
 壽轉成長遠之神藥若論迦釋如未應現長之入息看  
 時歎宜濁世經教循同歸之妙因今得莫二之大果但眾生  
 宿殖善激神而根鈍五濁鄣於大機六弊獲具慈眼卒不  
 可聞一乘回果之大理所以如來隨時而宜初就底苑并三乘之  
 分別派使咸各趣之迥果況以未離漫平說无相勸同脩或

## 日本最古の文字

古代日本人は、文字を用いていなかったと云いますが、果たして本統に文字言語と無縁な世界にあったのでしょうか？よく、文字が使えなかったので口誦により伝えてきたと云われてきました。実際、日本の古代神話をまとめた『古事記』(和銅四年(七一)九月十八日)には、「臣安萬侶」が「稗田阿礼」の口誦する内容を記録した。



二行目の一八文字目から訓んでみましょう。

然<sup>シカバ</sup>。上古<sup>シヤウゴ</sup>之時<sup>ノトキ</sup>。言意<sup>ゲン</sup>竝<sup>キナラヒ</sup>朴<sup>シヤク</sup>。敷<sup>シキ</sup>文<sup>ブン</sup>構<sup>コウ</sup>句<sup>ク</sup>。於<sup>オ</sup>レ字<sup>ジ</sup>即<sup>ニ</sup>難<sup>ナカシ</sup>。已<sup>ス</sup>因<sup>ニ</sup>訓<sup>ニ</sup>述<sup>ス</sup>者<sup>ノハ</sup>。詞<sup>コトバ</sup>不<sup>レ</sup>逮<sup>ス</sup>心<sup>ヲ</sup>。全<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>レ<sup>ル</sup>音<sup>ヲ</sup>連<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>。事<sup>ト</sup>趣<sup>ト</sup>更<sup>ニ</sup>長<sup>ク</sup>。是<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>今<sup>ニ</sup>。或<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>句<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>。交<sup>ニ</sup>用<sup>ス</sup>音<sup>ヲ</sup>訓<sup>ヲ</sup>。或<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>。全<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>レ<sup>ル</sup>訓<sup>ヲ</sup>録<sup>ス</sup>。

と、このような日本語に於けることは表現の有様が語られています。そして、この『古事記』は、中国の漢字音を以て、日本語の音に当てはめて表記しています。これより少し前には『人麻呂歌集』が編纂されています。そのよ

すがは、今日伝来するものとしては新しいいわば後世の写しでしかないのです、その文字形態様相を知る手がかりとしては、直接この表記字を用いることはできません。ですが、非漢文である漢式和文の特徴ともいえる文字と文章が成り立つその過程を確認する大切さは幾分なりとも遺されているのです。訓読のうえに成るこの漢式和文を完成させていく、その到達した結果が現行の日本語文となっているからにはほかなりません。

こうした漢字を訓読するとき、そこに日本語の助詞や助動詞が読み添えられ、一定の文章として表現されているのです。漢字の習学については、考古学発掘調査に基づく「音義木簡」が資料として今世紀活用できるようになってきました。その代表的な木簡として、①七世紀後半の滋賀県北大津遺跡出土木簡(林紀昭・近藤滋「北大津遺跡出土木簡」滋賀大國文16号)や、②八世紀の徳島県観音寺遺跡出土木簡(木簡学会『日本古代木簡集成』東京大学出版会刊)を挙げることができます。①の木簡には、「詮」の文字を「詮 阿佐ム加ム移母」と和訓を万葉がな表記しています。また、「賛」の文字を「賛 田須久」と訓読しています。②の木簡にも「椿」の文字を「椿 ツ婆木」と和訓を万葉がな表記しているのです。近年では、奈良の長屋王家木簡(三万六千点以上)が徐々に一般公開され、その貴重な文字を今世紀に具現化してきています。ちょうど、この『古事記』が編纂された時代に等しい資料であるため、文字比較検証のうえでもとても有効な一級資料なのです。

## 《参考資料》

◎紀田順一郎著『日本の書物』―太古のロマン』古事記』―[勉誠出版二〇〇六年刊]

1、『古事記』太古のロマン。「14頁」。古代↓「吾と汝と天の下」日本神話の獨創性」原稿用紙六十枚の原典」 [http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo\\_kojiki01.html](http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo_kojiki01.html)

◎神野志隆光著『漢字テキストとしての古事記』(東京大学出版会二〇〇七年二月刊)

『古事記』は、本文を訓主体で、歌を音仮名で書くという書き方を文字の技術的環境から選択しました。そ

これは、散文と歌との違いについて自覚して成り立たせられています。(中略)訓による叙述と、音仮名による歌の表現とが、張り合うようにして、いわば叙述を複線化しているのが、テキストとしての『古事記』のレベルだと見るべきです。〔70頁参照〕

今日は、この文字の起源、そして現代の日本列島にどのようにこれらの文字が伝播していったのか？、その大概を話しておきましょう！

『古事記』の上巻に、

かれ二柱ふたはしらの神天かみあまの浮橋うきはしに立たた。その沼矛ぬほこをさしおろしてかきたまへば。塩しほ許ほこ袁ほろ許ほろ袁ほろ邇にかきなして。ひきあげたまふときに。その矛ほこの末すきよりしたたる塩しほ。つもりて嶋しまとなる。これ淤能碁呂嶋おのころしまなり。

と「しほ【塩】」の語が見えています。

### ※「しほ【塩】」という文字を例にして

<http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/bunken-sihonomoji.htm>

[http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/ko\\_sihonomoji.pdf](http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/ko_sihonomoji.pdf)

大陸中国での「しほ」の文字は、正字の「鹽」であり、これが俗字で表記すると、「塩」となるのですが、この「塩」文字が大陸から朝鮮半島を経て日本列島にもたらされたとき、その表記字が些か異なる文字表記となっていることを本日ここで学びました。

では、なぜこのように、同一の文字を変容させてきたのでしょうか？

本日は、時間の関係で取り上げることが出来ないかもしれませんが、私はこれらの異なる文字表記(＝「異体字」)についてこれまでも取り上げてきました。その一つに「国」の文字があります。正字は「國」そして、俗字として「国」の文字が用いられています。ですが、古くは「国」と表記しました。その理由は、講義の時に触れることにしましょう。

また、中国の秦の始皇帝は、文字を以て国を統治する政策の意味で、多くの漢字文字を変容させた人物としても知られています。その一つに「つみ」という漢字があります。これ以前は、「辜」と表記して「つみ」と訓むのが定まった文字でした。この文字を「皇帝」の文字に類似することから、現代わたしたちが用いている「罪」の文字改めてしまったのです。現代の国家事業のひとつに国語審議会が正字を別字で代用するという文字政策を実施してきたのも似通っています。

《参考とする語句》

金石文 布帛文 竹簡・木簡 唐紙・和紙 洋紙 電子ペーパー

《今後の課題》

日本の最古の神話である『古事記』には、原本は残存していません。最古の資料として、鎌倉時代の古写本が名古屋の眞福寺に伝来しています。この、国宝『古事記』の本文(写本類)と電子印影された資料やこの内容を活字入力した文献資料を今後どのように私たちは見ていくのでしょうか？。そして、海外での碩学研究の現況はどのような展開に入っているのかを今後精確に見つめ問い直していくべきではないでしょうか。